

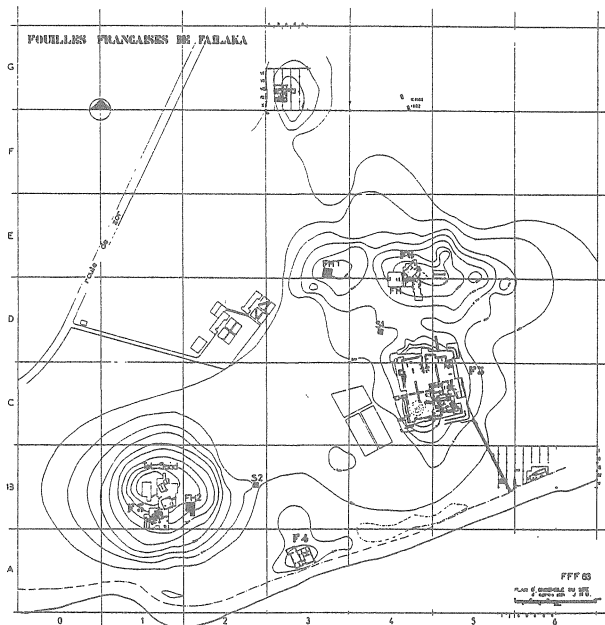
# ファイラカ（クウェート）における ヘレニズム時代の遺跡とギリシア語碑文

田 中 穂 積

## はじめに

ファイラカは、都市クウェートから東方約 25 km の海中にある小島で、形状は東西に細長く約 13 km、南北の幅は、最も広い所で約 5.5 km である。最初、この島において組織的な発掘に着手したのはデンマーク隊で、1958 年から始まり、1963 年まで続けられた。調査、発掘された場所は、ファイラカ島の西南部にあたる 2.5 km 平方の地域で、3 つの主要な地点が発掘された<sup>(1)</sup>。第 1 は西側の Tell Sa'ad で、前 2000 年紀の初めよりの住居跡がみられ、周りに仕事場や土器焼き炉、それに楔形文字粘土版などが出土した。第 2 は北側の場所で、これもほぼ同時期からの遺跡で、比較的大きく、堅固な建物が発見されていて、それを宮殿と呼んでいる。第 3 は、後で取り上げるように、ヘレニズム時代の 2 つの遺構である。その 1 つは、海岸に近い F 4 地点（地図 A 3）である。ここには、煉瓦造りのいくつかの部屋、それにかかなりの数のテラコッタ像製造用の塑像型が発見され、ヘレニズムの特徴がうかがわれる。もう 1 つは、Tell Sa'id とよばれている場所の F 5 地点（地図 C, D・4, 5）で、1985～63 年の間、継続して調査された。発掘の結果、一辺が約 60 m～70 m の四周を石垣で囲まれた外壁を持ち、その囲壁内に 2 つの神殿、いくつかの住居、それに陶器、貨幣、碑文などが発見された。ことに、碑文から、ファイラカ島が古代のイカロス島であることも判明した。

1983 年以後、フランスの発掘隊がヘレニズム時代の遺跡の再調査を始め、



Failaka 西南地域の発掘地点 (FFF 1983, p. 17)  
 各方眼は 100 m×100 m

ことに F5 の囲壁内外で、時代の変遷とともに複合建築がみられることから、神殿の周りに集まった個人住居区の歴史とその年代を明らかにするための補助的な発掘がおこなわれた。それに F6 地点（地図 D・E4）の発掘もすすめられた<sup>(2)</sup>。

以下において、ヘレニズム時代、ことにセレウコス朝時代に関する出土品や遺跡の特徴を取り上げ、そしてギリシア語碑文の問題点を考察してみたい。

## 1 ファイラカにおけるヘレニズムの特徴

先にあげたデンマークの調査団による発掘の成果は、年次的に報告がなされてきたが、そのうちヘレニズム時代に関しては、最終報告として、*Ikaros-The Hellenistic Settlements* が、順次、刊行されてきた。

### テラコッタ

デンマーク隊による発掘成果の最終報告の最初は、テラコッタ小像についてである<sup>(3)</sup>。このヘレニズム時代のテラコッタとその塑型の出土は、F5における囲壁のなかからと、F4でいくつかの部屋をもった1つの建物のなかからであった。その総数は129を教えている。このデンマーク隊の他に、フランス隊による Tell Khazneh 地点 (F5の北東約500m) の発掘から、115点のテラコッタ小片が出土している<sup>(4)</sup>。129のテラコッタについては、オリエント的、ギリシア的、形状不確定なもの3つのグループに分類されている。オリエント的なものは、前4世紀のギリシア人の到来以前とおもわれる前4世紀頃からのものもあるが、ごくありふれた型、また一般にリシアの影響をうけたもので、そのなかには女性のヌード、騎馬の男性、馬、動物、男性の頭像、さらにバルティア人の座像もみられる。ギリシア的なものは、人物像が主で、そのなかに若いヘーラークレース像や、アレクサンドロス大王像の塑型とみなされるものもあり、制作はバルティア時代にまでおよんでいる。これらギリシア的なものについては、概して前3世紀後半と前2世紀のものが多い。第3のグループは、骰子状のものもみられるが、形状不明のものがほとんどで数は多くない。

### 陶器

デンマーク隊による発掘成果の次の最終報告は、陶器についてである。そのほとんどはF5であるが、追加的にF4からのものもある<sup>(5)</sup>。編集者の L. Hannestad は、陶器の形状を主に分類しており、出土の層序については特に断っていないが、F5の場合、層序的には、まず囲壁とその内部の神殿など、最初の遺構からのグループ、次に同じ囲壁内外で個人的住居が現われた時期のグループに分けることができる。それぞれについての年代は、前者が前3世紀半ばから、前2世紀末か前1世紀初め頃、後者は前1世紀末から、1世紀にかけてである。また、陶器分類のカテゴリーとして、ヘレニズム的なものとオリエント的なものに分けられる。ヘレニズム的なものには、ギリシア人本来的

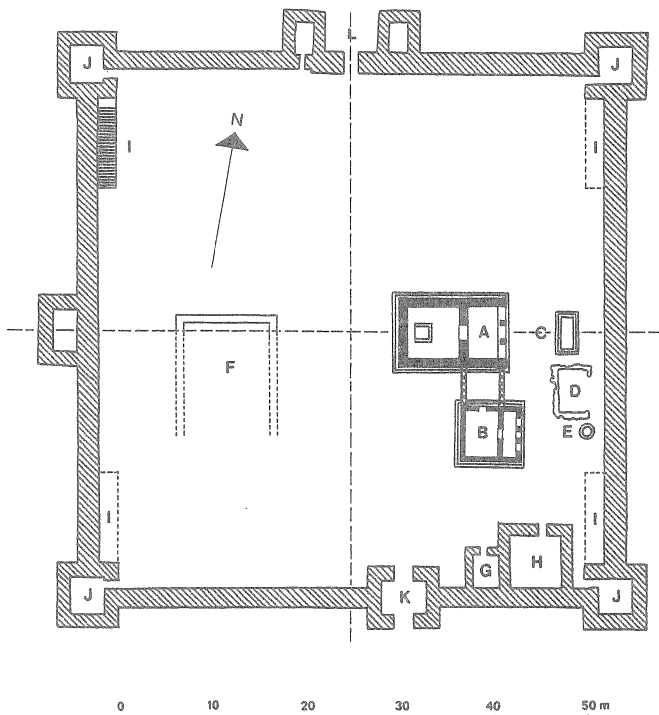
なものから、その影響のもとに地中海からその東方で制作されたものにまで及んでいる。例えば、ランプでは回転式、塑型のものがあり、料理皿、アンフォラ、上薬をかけ縁が内側に曲がった鉢、その他がみられる。アンフォラについては、ロドスからのものがある。オリエント的なものは、その生産地が広範にわたっている。つまり、アラビア北湾岸域の Thaj, Ayn Jawan 等、西アラビアそれにパレスチナ、またメソポタミア、スシアナに及んでいる。

以上の陶器に関し、時代的には、総じてばらつきがみられる。しかし、あるタイプについては、時代が想定される。例えば、ギリシアの黒色の上薬をかけたタイプについては、その破片がアテーナイのアゴラ出土のものに類似しており、前 285～前 250 年頃とみられる<sup>(6)</sup>。これらは、囲壁の最も低い層から出土しているのである。また、先にあげたロドスで制作されたアンフォラの刻印から、それらすべては前 225～前 220 年の間とみられる<sup>(7)</sup>。その 1 つが同様な層序にあたる神殿 A の最も低い層から発見された。一方、sigillata 様式の鉢は、おそらく前 1 世紀、また、いわゆるナバタイ鉢は前 1 世紀後半から 1 世紀前半のものである<sup>(8)</sup>。

### 建造物

デンマーク隊による発掘成果の最終報告の第 3 は、F 5 の建造物についてである<sup>(9)</sup>。そこには、囲壁とその内部の建物、ことに神殿 A と神殿 B、ならびにそれらの祭壇等の建造物に取り上げられている (F 5 囲壁図)。併せて、神殿 A の近くで発見されたギリシア語碑文の解釈を問題にしている。ここでは、まず建造物について概観することにし、ギリシア語碑文に関しては次章で取り上げることにする。

発掘の対象となった F 5 地点は、約 100 m 四方で、そのうち遺構は 60 m～70 m 四方である。この遺構はさまざまな呼び方がなされてきた。すなわち、要塞化された町、堡壘、アクロポリス、神殿域、要塞等である。これらの表現は、この建造をどのようにみるかに関わっている。デンマーク隊の最終報告書では、K. Jeppensen によって、聖なる囲い地 (Sacred Enclosure) といった



F5の囲壁と神殿A・B (Ikaros, Vol. 3, p. 74)

表現がとられている。

このF5の建造物は、いわば複合的な建造物であるが、上図のように最初に構築されたあと、囲壁や内部の建物について、構造上の変化がみられる。囲壁は元々は方形をなしており、壁の中核部は石灰石を使い、粘土の煉瓦でもって覆っていた。外側の一边は約58.6m、厚さ1.7m~2.2m、元々の高さは、L. Hannestadによれば、約7mあったとおもわれるが、発掘当時は約1.75mしか残っていなかった。囲壁の四隅には方形の塔があり(図J)、比較的保存のよい北東の塔は、外側6.65m×7mである。囲壁内の広さは約55m×55mある。囲壁の南側と北側にそれぞれ1つの門があり(図KとL)、前者は海岸に向いている。O. Callotらは、貨幣から推定して、この囲壁の構築は前

3世紀初め、セレウコス1世時代とみている<sup>(10)</sup>。

このF5の囲壁内の最も特徴ある建物は、二つの神殿で、AとBの符号でもってよばれており、それぞれに祭壇が付属している(図CとE)。ことに神殿Aについては、ギリシアの神殿建築の特徴がみられる。

神殿Aは、東向きで、イン・アンティス(in antis)形式の2本の柱を持つものであった。形状は長方形をなして、縦の長さは東西に11.5m、横は南北に約7.5mである。この神殿Aは2つの部屋からなっており、その1つであるナオス(naos)は5.6m四方の広さで、床には大きさは様々で、四角い石灰石の平板が敷き詰められている。その東に接するもう一つの部屋はプロナオス(pronaos)で、奥行約4m余、床面はナオスと違い土である。神殿の側壁は基壇よりわずかに上の部分しか残っていない。

この神殿Aの特徴について2点ほどあげておきたい。その1つは、先にあげたように、プロナオスの前面(東面)で、その中央部にある入口両側の2本の円柱である。そのうち南側の柱は本来の形で立っており、北側の柱は下部のみが残っていた。南側の円柱についてみると、その下部周縁には葉状の飾り彫刻が施されており、この模様はベルセポリスやスサにおけるフケメネス朝時代の建築にみられる。しかし柱の上部には、ナオスのなかで発見されたイオニア様式の柱頭がおかれていたとみられる。もう1つの特徴は、ギリシア建築様式にみられるアクロテリオン(akroterion)である。かなり大きなもの3個が発見されており、それらは神殿の前面上部における三角のペディメント(pediment)の中央上部と左右の両端におかれていたとおもわれる。

また神殿Aの東、5m離れたところに、この神殿の祭壇があり、その基礎部分は長方形で、4.58m(南北)×2.48m(東西)である。

神殿Bについては、ほとんど基礎部分しか残ってなくて、その前にあたる東に少し離れて祭壇跡がみられることから、神殿と推定される。その基礎部分は、本来、神殿を囲むように最下壇、神殿壁の基礎となる上部基壇からなっていたとおもわれる。それに、この神殿に用いられた円柱の柱頭とおもわれるドーリア様式の柱頭が発見されている。

さらにこの神殿 A の位置が方形をなす囲壁内の東側半分の箇所にあたり、それに南北の中央を東西に横切る線上の真上にある。神殿 B はその南側で、規模は小さい。このことから、神殿 A が主要な位置を占めていたと考えられる。K. Jeppesen はこの神殿をアポローン神のもの推定している。これについては、後でまた取り上げるが、同氏は神殿の意義を重視し、この囲壁を聖域の聖別壁とみたためである。なお、囲壁内の西半分は、建物が見られず、使用目的は定かでない。

この囲壁の内部は、本采、個人の住居用のものでなかったことは確かである。しかし、次第に住居が入り込み、本来の神殿の機能が減少したとみられる。それはセレウコス朝の勢力の衰退に伴い、この島に残った植民者が自己防衛のために囲壁を利用して、そのなかに住むようになったこと<sup>(11)</sup>、あるいはある時期において住民の再組織がおこなわれ、そのグループが住むようになったこと<sup>(12)</sup>などが考えられる。この点については、後で取り上げる碑文に合わせて問題にしたい。

### 貨幣

以上、デンマーク隊のまとまった最終報告の他に注目すべきは、ギリシア語貨幣である。ファイラカで発見されたギリシア語貨幣にはデンマーク隊の他、フランス隊によるものがあり、それらは銅貨と銀貨である<sup>(13)</sup>。また発行事情からみれば、アレクサンドロス大王とセレウコス朝の時期の発行、アラビアでの発行、カラケネでの発行といった事情がみられる。しかし、ファイラカで発行された形跡はない。

デンマーク隊によるものは、1960年、F5における発掘で、銀貨13枚が発見されており、アンティオコス3世時代の埋蔵とみなされている。また、1961年、F5で発掘されたものはアンティオコス3世とセレウコス2世時代のものがみられる。1984年には、フランス隊が Tell Khazneh でアレクサンドロス(大王)タイプのテトラドラクマ銀貨26、セレウコス1世の銅貨1つを発見している。これら貨幣は、西はアンピポリス、コリントス、東はエクバタナにま

で及んでいる。

これら貨幣の発見から、いくつかの問題点が見出されるが、ここでは2つのことについてあげておきたい。その1つは、アンティオコス3世時代、それに次のセレウコス4世時代がファイラカやペルシア湾を含めて、セレウコス朝時代の東方交易が最も盛んであったように受け止められることである。第2点とは、F5における建造物の年代についてである。1960年に、神殿Aとその祭壇より後でつくられたとおもわれる、一住居跡で発見されたアンティオコス3世のテトラ・ドラクマ銀貨1箇、それは前223年と前212年の間の発行とみなされることから、神殿Aあるいは神殿Bの建設はこの年代以前とみられる<sup>(14)</sup>。

## 2 ファイラカで発見されたギリシア語碑文

ファイラカでは、いままでのところ3種のギリシア語碑文が発見されている。

その1つは、いわゆるソーテレース碑文と呼ばれているものである。1937年に Tell Khazneh のヘレニズム遺跡で発見されたとみなされている。この地点は、F5から北東約500mにあたる。石材は石灰岩、高さ45cm、幅40~42cm、厚さ20cm、最初、M. N. Todによって紹介された。7行からなる<sup>(15)</sup>。

ソーテレー「ス」、アテーナイオ [ ] ならびに [兵士たち]、ゼウス・ソーテール、ポセイドーン、アルテミス・ソーテイラに

最初の行の Sōtel[ēs], これはソーテレースであろう。二行目 Athēnaio[u または s] は、アテーナイオスの子の、アテーナイ人の、あるいはアテナイオス、といった三通りの見方ができる。ソーテール(救済神)とソーテイラ(救済女神)は、ゼウとアルテミスの通り名であり、この碑文は三神への奉獻碑銘である。碑文は刻文の特徴から、前4世紀ないし前3世紀初めとみなさ



れる。

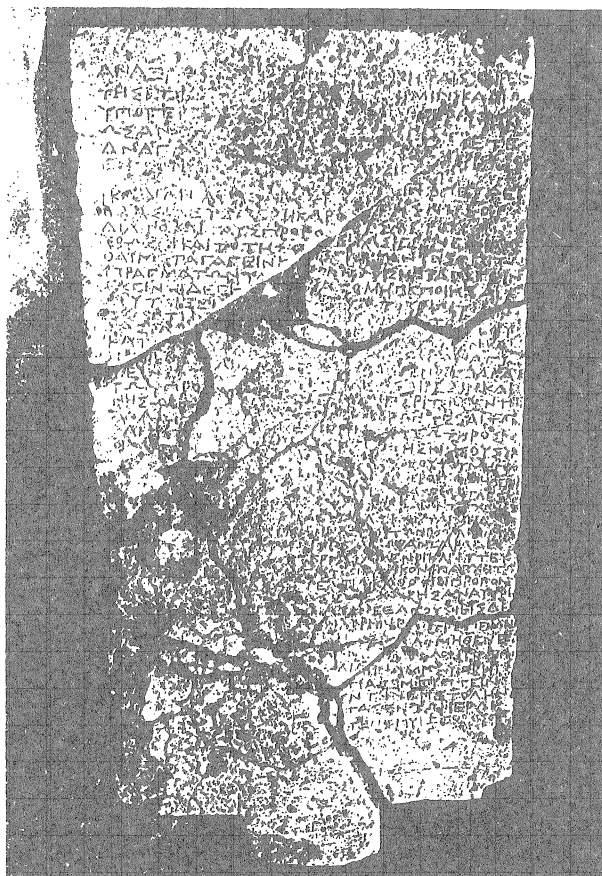
ソーテレースの人物については、この碑文以外に手掛かりはない。ペルシア湾の探険や航行に関しては、古典文献から、アレクサンドロス大王からセレウコス朝時代にかけてかなりの記述が知られている。しかし、ソーテレースとの確実な関わり合いを見出すことはできない。また、この奉獻碑文はイカロス島の植民によるものとみることもできる。アレクサンドロス大王がこうした島に植民させようとしたことから (Arrian. *Anab.* VII, 20, 2-5; *Ind.* 36, 3-9), その当時の植民による奉獻文と推定することも可能である。また、後で取り上げる碑文からみて、次のセレウコス朝の初期の王たちがこの島の植民に関わったことは確かであり、それら植民によるものとも考えられる。しかし、ソーテレースとの関係は不明である。

第2は、デンマーク隊が、1959年のF5の発掘において、神殿Aの入口で発見した碑文である。石材は魚卵状石灰岩、高さ約26 cm、幅約20 cm、厚さ約9 cm。4行からなる<sup>(16)</sup>。

[神々に], イ [ ] からの者たちが、祭壇を捧げた

碑文の刻み方はあまり丁寧でない。しかし、文字の位置、また配列は前3世紀前半かとおもわれる。欠字部分の読みについては、「イカロス (Ikarou) からの者」とみるか、「インド (Indou) からの者」とみるか、この2つの読み取り方が、問題の焦点となっている。

第3は、アナクサルコスとイカディオーンなる者からの二通の書簡である。同じくデンマーク隊が1959年に、神殿Aから東約7 m余のところの窪地、すなわち神殿Aの祭壇の南側で発見した。材質は荒い石灰岩、かなり珊瑚の粒子を含んでいる。高さ116 cm、幅は平均69.5 cm、厚さ平均16 cmある<sup>(17)</sup>。発見された場所が窪地であったことから、当初から甚だしく破損していた。また、碑文を立てるための基礎石が神殿A南側のアンタ (anta) の前で発見されている。表面のほぞ穴は長さ22.5 cm、幅は16 cm、深さ9 cmあ



Failaka 出土の 44 行ギリシア語碑文 (*Ikaros*, Vol. 3, p. 84)

り、当碑文柱のほぞに合っている<sup>(18)</sup>。

この碑文は、44 行からなっているとおもわれるが、発見当初から破損しているうえに、材質の脆さから、表面が摩滅していたりして、碑文下部の左端はほとんど読み取ることができず、判読が困難であった。最初、K. Jeppesen による復元が発表されたあと、何人かが復元を試みており、K. Jeppesen 自身、約 30 年後の 1989 年に修正した復元を発表している。現在、The Kuwait Na-

tional Museum に保管されている当碑文について、私は写真による看取で、実物を照驗していない。そこで、K. Jeppesen, C. Roueché と S. M. Sherwin-White 両人、F. Piejko らによる復元の見解を取り上げながら、次に試訳をあげることにする。

アナクサルコス、イカロスの住民 [に] 敬白。イカディオーンがわれわれに [送ってきた] 手紙について、われわれは以下に、その写しを [あなた方に] 書き送った。[あなた方は] この手紙を [受け取り次第]、それを [ ] 刻文して、神殿に [残すように]。[ ] 年、アルテミシオス月 [2] 7日。敬具。(1-6 行目)

(1 行程度 空白)

イカディオーンより、アナクサルコスに敬白。王はイカロス島について、先王たちがこの島を聖別し、その王たちがソーテイラ(救済女神)の神殿を移すことを決めたことのゆえに関心をもっておられる。そして王たちは、当該役人に移すことの命令を遂行するようにと書いた。かれらは、阻止されたか、あるいは何か他の理由か、いずれかのため、移していなかった。しかし王 [ ] がわれわれに書いたとき、われわれは移して、そして [神々] のために体育競技を催した。そして、われわれは、なおも [王] と [先王] たちの政策にしたがって、手配を整え、[ ] せんとした。そして島の植民、ネオコロイ(神殿の役人)あるいは他の者たちに関し、[ ] ソーテール(救済神)と [ ] 島において相提携し、[ ]。(7-25 行目)

[かれらはその設定において落着くであろう]。いかなる方法によっても [ ] 決して侵害されることはない。すべての者は [保証] と権利の [両方をえるために共同体の利益に] 注意を払うであろう。それゆえ、かれらのある者が [自身の] 労力でもって庭園や [菜園を] 耕作することによって島の土地 [ ] 使用によって利益をえ、また法的な相続の権利をえるとしても、不当とみなされてはならない。個人的な [ ] と税の免除は [王の] 父祖たちの時代と同様に、かれら自身ならびに [島内]

と [島外の] 取引所で交易をする者について保証されるであろう。[住民が非難されないためにも]、いかなる者も暴力行為を [なし]、[各個人へ] [ ] [不正なる手段で侵すことは許されない]。したがって、この手紙を [ ]、[イカロスの] 神殿において [石柱] に刻むよう。  
[ ] 年、アルテミシオス月 17 日。敬具。(25-44 行目)

この碑文は、2つの書簡からなっており、前文にあたる部分と本来の趣旨に分けられる。その最初は、アナクサルコスより、イカロスの住民への書簡である。アナクサルコスはセレウコス朝支配下の地方長官で、イカロス島を管轄下においていたとおもわれる。このアナクサルコスがセレウコス朝の官房の有力者の一人とおもわれるイカディオーンから、手紙を受取ったという前言が添えられている。

この添え書きに続いて、イカディオーンからアナクサルコスに宛てられた手紙の内容が記されている。その前半には、かつてソーテイラ（救済女神）の神殿を移動させるよう命令されていたことが遂行され、それを記念して体育競技も催されたことに満足していることを伝えている。次いで後半については、判読が困難であるが、この島の安寧について述べており、その趣旨はほゞ次のようである。すなわち、それぞれの立場にあるすべての住民は相互関係に留意すること。そして、土地を欲する者は、耕作により、世襲的に所有できる土地を割り与えられるべきであること、税の免除や商行為の保護は以前の王の時代と同様に保証されることなどが述べられている。

碑文中の月名アルテミシオスは、現在の3月～4月頃である。しかし、年代については、判然としない。K. Jeppesen は、最初の発表において、セレウコス紀年 73 年（前 238 年）、後で 71 年（前 240 年）と読み変え、そしてイカディオーンをヒエローニューモスが『ダニエル書注解』（XI, 6）において、セレウコス 2 世時代にあげている高官のイカディオーンと同一視している。また、F. Piejko は、セレウコス 2 世時代ではあるが、セレウコス紀年 69 年（前 243 年）と読む。一方、C. Roueché と S. M. Sherwin-White 両人はセレ

ウコス紀年 109 年(前 204 年)と読み、アンティオコス 3 世時代とみる。また、アンティオコス 4 世時代とみるのは、F. Altheim と R. Stiehl 兩人である。これらについては、古典文献上にみられる記述から、あるいは貨幣上の知見から、それぞれ示唆を受けていることはいうまでもない。したがって、碑文内容の概略から、特定の王や時代を確定することは困難である。しかし、K. Jeppesen による碑文復元については、注目されてよからう。

ところで、碑文中のソーテールは、最初にあげた碑文にみられるようにゼウス・ソーテールを指すのであろうか。ストラボーンは、エラトステネースの著述を引用して、イカロス島には、アポローンの神殿とタウロポロス(アルテミスの社)の神託所があるという(Strab. XVI, 3, 2)。このストラボーンの表現をみると、セレウコス朝の祖神とされるアポローン崇拜がイカロスに持ち込まれたとする見方もできる。先にあげたように、神殿 A はアポローンに捧げられたとみるのは、K. Jeppesen である。これは決して無理な推論ではない。ただ、アポローンとソーテールを結びつけるところに難点がある。ところで、K. Jeppesen は、碑文中のソーテールの他に、欠損部分から、テオス(神)なる語を読み取ろうとする。そして、それらの語をアンティオコス(1世)・ソーテール、アンティオコス(2世)・テオスらにみられるエピセットに結びつけ、また、アンティオコス(1世)・ソーテールの妃ストラトニケーにたいする崇拜とソーテイラ(救済女神)を関連づけようとする。つまり、同氏はセレウコス朝の祖神アポローンならびに初期セレウコス朝の王たち、それにストラトニケーにたいする崇拜が、F5 における神殿 A と神殿 B のそれぞれに当てはまるとする<sup>(19)</sup>。や、大胆な仮設といえよう。

上記の推論は別として、セレウコス朝は早い時期からイカロス島に関心を寄せていたことは、確かである。しかし、いつ頃に、どのような形でこの島にギリシア語を話す植民が居住したかについては、確かでない。一つの見方として、エーゲ海中にあるイカロス島から植民したこともありえないことではない。いずれにしても、ソーテイラ(救済女神)の神殿を移動、おそらく F5 の囲壁内の神殿に移したとき、島内の居住者について、市民団形成の再組織が

おこなわれたのかも知れない。もし、そうであっても、その再組織によって、イカロスがセレウコス王国内にみられた自治ポリスの地位をえたとは考えにくい。なお、神殿の移動に関して、その最初にあった場所については不明である。イカロス島以外の他所からとみることもできるが、あるいはこの島の海浜にあたる F4 地点におかれていたのを、風水害の危険を避けるため、神殿 A に移したことも考えられる。

## お わ り に

ストラボーンやアッリアーノスその他の古典の記述からみて、イカロス島やテュロス島がペルシア湾の交易に主要な役割を果たしたことがうかがえる。ことにティグリス、ユーフラテスの河口に近いという条件は、ティグリス河畔のセレウケイア、あるいはカラックスとの連結、また、ペルシア側の沿岸、アラビアの沿岸との連絡を蜜にしていたことは、テラコッタ、陶器などの出土品からもうかがえる。古くから住民がいたこの島にギリシア語を話す植民が来住したわけであるが、もしセレウコス朝初期の王たちの推進によって植民がおこなわれたとすれば、それは軍事、経済の両面における役割を課したものとおもわれる。しかし、F5 の囲壁建造物が要塞の役目を果たしたかについて、それは十分に機能したとは考え難い<sup>(20)</sup>。勿論、そうした機能も意図されたであろうが、第一義には、島の中心的位置としての聖所の役目を担ったとみる方が至当であろう。それがイカディオーンの碑文に表れており、聖所とセレウコス朝との密接な関係がうかがえる。しかし、セレウコス朝勢力の後退とともに、聖域の威厳は衰退し、その一部が住居として用いられていったとみられる。

### 略記号

*FFF* = *Failaka Fouilles Françaises*

*Ikaros* = *Ikaros-The Hellenistic Settlements*

*JASP* = *Jutland Archaeological Society Publications*

*PSAS* = *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*

SEG = *Supplementum Epigraphicum Graecum*

TMO = *Travaux de la Maison de l'Orient*

註

- (1) Salles, J.-F., Introduction, dans *FFF 1983* (TMO N° 9), (Lyon, 1984), 9-19; Calvet, Y. et Salles, J.-F., Bibliographical notes (1984-1988), dans *FFF 1936-1988* (TMO N° 18), (Lyon, 1990), 11-22; Potts, D. T., *The Arabian Gulf in Antiquity, Vol. I, From Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire, Vol. II, From Alexander the Great to the Coming of Islam*, (Oxford, 1990), esp. Vol. II, 154-196.
- (2) F 6, Tell Khazneh, F 5 についてのフランス隊の発掘については, Calvet, Y. et Salles, J.-F., *FFF 1984-1985* (TOM N° 12), (Lyon, 1986).
- (3) *Ikaros Vol. 1, The Terracotta Figurines*, by H. E. Mathiesen, *JASP*, XVI: 1, (Copenhagen, 1982). 以下, 同書を *Ikaros Vol. 1* と略記。
- (4) Salles, J.-F., Tell Khazneh: les figurines en terre cuite, *FFF 1984-1985* (TMO N° 12), 143-200.
- (5) *Ikaros, Vol. 2: 1-2, The Hellenistic Pottery, (Part 1, Text) With a Survey of Hellenistic Pottery in the Near East, (Part 2, Catalogue and Plates)*, by L. Hannestad, *JASP*, XVI: 2, (Aarhus, 1983). 以下, 同書を *Ikaros, Vol. 2* と略記。
- (6) *Ikaros, Vo 1. 2: 1*, 77.
- (7) *Ibid.*, 77.
- (8) *Ibid.*, 78.
- (9) *Ikaros, Vol. 3, The Sacred Enclosure in the Early Hellenistic Period. With an appendix on epigraphical finds*, by K. Jeppesen, *JASP*, XVI: 3, (Aarhus, 1989). 以下, 同書を *Ikaros, Vol. 3* と略記。
- (10) Callot, O., Gachet, J., Salles, J.-F., Some notes about Hellenistic Failaka, *PSAS*, (1987), 37.
- (11) *Ikaros, Vo 1. 2: 1*, 75-78.
- (12) Callot, O., Gachet, J., Salles, J.-F., *PSAS*, (1878), 39.
- (13) Mørkholm, O., Græske mønter fra Failaka, *Kuml* (1960), 199-207; Id., Nye møntfund fra Failaka. *Kuml* (1979), 219-236; Callot, O., Trouvailles monétaires de Tell Khazneh, *FFF 1884-1985* (TMO N° 12), (Lyon, 1986), 291-296; Amandry, M. et Callot, O., Le trésor de Failaka 1984 (Koweit), *Revue numismatique*, 30 (1988), 64-74, Pl. XII-XIV.
- (14) *Ikaros, Vol. 1*, 73; *Ikaros, Vol. 2: 1*, 75.

- (15) Tod, M. N., A Greek inscription from the Persian Gulf, *Journal of Hellenic Studies*, 63 (1943), 112–113; *SEG XII*, 556; Altheim, F. und Stiehl, R., Die Seleukideninschrift aus Failaka, *Klio*, 46 (1965), 273–281, bes. 274; Piejko, F., The Inscriptions of Icarus-Failaka, *Classica et Mediaevalia*, 39 (1984), 89–116, esp. 89–92; Roueché, C. and Sherwin-White, S. M., Some Aspects of the Seleucid Empire: the Greek Inscriptions from Failaka in the Persian Gulf, *Chiron*, 15 (1985), 1–39, esp. 4–10; Marcillet-Jaubert J., Une nouvelle inscription grecque à Failaka, *FFF 1986-1988 (TMO N° 18)*, (Lyon, 1990), 193–195.
- (16) Jeppesen, K., Et kongebud til Ikaros, *Kuml* (1960), 186; Altheim, F. und Stiehl, R., *op. cit.*, 274; Piejko, F., *op. cit.*, 92–94; Rouechié, C. and Sherwin-White, M. S., *op. cit.*, 10–13; *Ikaros, Vol. 3*, Jeppesen, K., *op. cit.*, 116–118.
- (17) Jeppesen, K., *Kuml* (1960), 174–198; *SEG XX*, 411; Altheim, F. und Stiehl, R., *op. cit.*, 273–281; Piejko, F., *op. cit.*, 94–116; Roueché, C. and Sherwin-White, *op. cit.*, 13–39; *Ikaros, Vol. 3*, Jeppesen, K., *op. cit.*, 82–110, 120–122 (notes).
- (18) *Ikaros, Vol. 3*, 35.
- (19) *Ibid.*, 79.
- (20) Lawrence, A. W., *Greek Aims in Fortification*, (Oxford, 1979), 179.